

スポーツの話がしたい

F「今回のテーマは、スポーツです!」

T「今年はオリンピックが開催されるので、このテーマにしたんですね」

F「そう! スポーツの祭典です!!」

M「いろんな競技があるよね~ 今年はなにがあるの?」

T「えーと……」

(パリオリンピックでおこなわれる競技が書いてある紙をのぞきこむ3人)

F「陸上、バスケットボール、テニス……」

T「水泳、サッカー、スケートボード……馬術っていうのもあるんですね」

M「そうよ~ 馬術は、オリンピックで唯一動物と一緒にできる競技なんだよね」

F「馬に乗って、障害物を飛び越えたり」

M「そうそう! 選手が、馬に合図して踊ってるように見せたり」

F「馬との絆が大事な種目ですね」

M「近代五種っていう競技のなかにも馬術があるんだけどね、あんまり知られてないの!

みんな応援してあげて~!」

F「今年のYAは馬術を推していきましょう!」

T「おー!」

M「おー! って、なにすればいいと思う? Tさん」

T「えっ……と、図書館で乗馬体験?」

M&F「いや、さすがに無理」

(ふたたび、パリオリンピックでおこなわれる競技が書いてある紙をのぞきこむ3人)

T「わたし、バドミントンって、公園とかでやる楽しい感じのしか知らなくて……」

競技としての試合を見て、びっくりしたことがあります」

M「あれ、怖いよね!! 速すぎて」

F「シャトルがヒュンヒュンいってるのが聞こえますもんね。目で追えない」

M「ね~。当たったら絶対痛いやつ。ずっとスマッシュ打ってる勢いだよね」

T「衝撃でした」

M「ところで、あなたたちはなにかスポーツって、できるの?」

F「……一輪車?」

T「……なわとび?」

M「小学生か! ちなみにわたし、倒立はできます」

F&T「すごい! じゃあバク転とかって……!!」

M「いや、さすがに無理」

インスタグラム公開中 ここにアクセスしてね★

<https://www.instagram.com/hondarake55>



←QRコードでも
アクセスできます

ホンダラケ

2024.6.1

本を読みながらスポーツする

M&F 「本を読みながらスポーツ??」

T 「はい。スポーツがテーマの本を読めば、君もアスリートになれる☆多かもしれないと思って……」

M&F 「いや、さすがに無理」

T 「……可能性は無限大ですからっ!」

『ヨンケイ!!』 天沢夏月/著 ポプラ社 2021年刊



F/アマ

東京の離島にある高校の陸上部に、短距離走を専門とする男子部員が4人そろった年、彼らは400メートルリレーをやってみないかと提案されます。挑戦を決め、インターハイ予選突破を目指して練習を始めますが、走ることやリレーに対する思いの違う4人のチームはバラバラ……。でも、リレーのバトンをつないでいくことを通して彼らは——不器用で、言葉じゃなくて走りでも語り合うような絆に、まぶしいくらい青春を感じる、さわやかな作品です。

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のYA(ヤングアダルト)コーナーでご覧いただけます。

2か月に1度、年6回発行予定です。

ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。YAコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記

～三田学園図書委員会より愛をこめて～

テーマは「新生活」

新しい友達できた？ でも数が多けりゃいいってもんじゃないのよ。

『氷菓』

米澤穂信／著 KADOKAWA 2001年刊

何事にも省エネに取り組む高校一年の折木奉太郎は、海外にいる姉から来た突然の手紙で「古典部」なる部に入部しろと脅され、渋々古典部の戸を叩く。そこで出会った千反田えるはもう一人の古典部の入部希望者。彼女の口癖、「私、気になります」の一言で古典部は動き出していく。

そのうち明らかになる、過去の古典部とは。

P.N. 蒼 (高校2年生)



F/ヨネ

「こんな本、棚から見つけました」のコーナー

このコーナーでは、スタッフが棚を見て“再発見”をした本を紹介します

『わたしは夢を見つづける』

ジャクリーン・ウッドソン／著 さくまゆみこ／訳 小学館 2021年刊



931/ウツ

本の背に貼ってある「931」という番号は外国文学の中で詩歌を表しています。カラフルな背表紙が目を引きはすなのに、読み物とは少し離れたところに置いてあるがためになかなか手に取ってもらえない…。本書はオハイオに生まれた著者の半生が散文詩で書かれています。心に浮かぶままに言葉を連ねたら、自然と散文詩の形になったような作品です。一文一文が短いが、ちゃんとストーリーは繋がっているの、文字がいっぱい詰まった読み物は苦手、という方におススメです。

新着図書 Pick Up

『ぼくの心は炎に焼かれる 植民地のふたりの少年』

ビヴァリー・ナイドゥー／著 野沢佳織／訳 徳間書店 2024年刊



933/ナイ

物語の舞台である1951年のケニアは、イギリス植民地時代。登場人物は架空ですが、実在した状況をもとにした物語です。

白人の少年マシューと、マシューの家で働く現地の少年ムゴ、二人の視点から語られています。彼らのおかれた状況は加害者・被害者と単純に分けられるものではありません。どちらの少年にとっても、ままたまらない苦しさがあります。ぜひ、「作者あとがき」まで読んでください。語ること、語られることの意味を感じます。

難しいと思われているけれど、実は面白い名作があるから読んでみてほしいんです。

『孤高の人 上・下』

新田次郎／著
新潮文庫刊 2009年改版



登山家・加藤文太郎をモデルにしたフィクション作品。働き始めてから、いつかヒマラヤ登山に挑戦すると決めて貯金を始めたり、登山に耐える体を作るため絶食期間を設けたり(よい子もわるい子もマネしちゃうだめ。絶対。)。人付き合いもなく、黙々と登山に向き合うストイックさ。一人で何かを追求する姿はまさに孤高。美しくも厳しい山の描写にも注目してほしい一冊です。



F/ニツ